

4—23

1 (表紙)

■ 年四月

(破損)

■ ■ 訴詔之御請并竹嶋渡海之次第先規より書附之写

伯耆国米子町人

村川市兵衛

大谷政太郎

2 (白紙)

3

一 大廣院様御代元文五年四月從

御国屋敷河村彦十郎様を以

御公儀江被為遊御達候付、乍恐私共祖父之者儀

御公儀江御訴詔之儀共被為逮御沙汰候趣

委者其節祖父木曾九右衛門事參府仕候条

曲記事非私非先祖之者江竹嶋渡海之儀被為

仰附候次第先規より書付之写左之通御座候、尤右

御達之節願書之写如左

伯耆国米子町人

村川市兵衛

大谷九右衛門

乍恐奉願口上之覺

先祖

一 竹嶋渡海之儀私共祖父之者江被為

仰付候濫觴者松平新太郎様因幡伯耆

被為遊御領知候節元和三年御仕置之為

5

刻

上使阿部四郎五郎様御越之節乍恐私共先祖之者儀

權現様以来

御由緒之旨趣共委細書附之差出、右就

御由緒而竹嶋渡海仕度之段相伺、翌元和四年
当御地江先祖之者共相詰右御訴詔申上候之所

御由緒之儀共御吟味之上同年五月十六日

新太郎様江以御奉書願之通渡海可仕之

6

旨被為仰附、則右之

御奉書從新太郎様先祖之者共頂戴仕、就夫

御目見被為仰附冥加至極難有仕合奉存候

其後每歲渡海仕候處元錄五年彼嶋江唐人相渡
依之松平伯耆守様より御注進被仰上、夫より
同六年七八年迄段々御差図を以渡海仕候所
年々唐人相増候様子ニ付追々
伯耆守様より御注進被仰上候所竹嶋渡海制禁

7

之旨元錄九年正月廿八日伯耆守様迄以

御奉書被為仰出候段、則從

伯耆守様被仰渡候御事

一

竹嶋渡海禁制被為仰付候ニ付村川市兵衛儀元錄

年中当御地江相詰御歎之御訴詔申上候半病氣

私義者

付先国元江帰度旨御断申上罷帰候、其節木下九右衛門
事幼少尤困窮仕候ニ付右市兵衛と一所ニ当御地江
相詰候儀難相成乍存其儀無御座候、其後享保

8

九年四月從

竹嶋渡海越方之儀段々被為遊

御尋候付相模守様迄御請書仕指上候、其節

茂木谷九右衛門事何卒当御地江相詰御歎之御願
申上度所存御座候得共困窮仕罷在候故乍殘念

当御代様

2

遲退仕候御事

9

右之通元和四年より元錄(ママ)四年迄竹嶋江渡海仕候所彼嶋江唐人相渡候付渡海禁制被為仰付候以後兩木非渡世可仕様度無御座候所御領主より御憐愍を以先者及渴命不申様被仰付置候段是以

御上之御大恩之筋難有仕合奉存上候、然ハ當時至極困窮及候付乍恐以御慈悲如何様共取続候様被仰付被為下候ハ、難有仕合可奉存候全御上江奉対私共式之ものケ様之御願奉申

10

上儀千万恐入奉存候得共

台徳院様

御代元和四年より元錄(ママ)八年迄七拾八年之間九年二

壹度宛

公方様江

御目見被為仰附其上御紋之

御時服拝領之仕并道中御紋之指札蒙

御免竹嶋江渡海之船江御紋之船印頂戴仕

11

且道具蒙御免元和四年より元錄(ママ)八年迄

及八拾年每歲彼嶋江渡海仕、尤渡海禁制被

仰付候以後今以御領主より及渴命不申様御憐愍之

御儀共是又右書顯候通重々莫太成奉蒙

御恩沢候者之子孫末々ニ到至極之及困窮、此上

難取続相成候得ハ偏二

廣

御庫恩忘却仕候様二茂可罷成哉と誠以不顧恐此度木斧九石衝用相詰右兩人者身命相続候様

12

御慈悲之筋乍恐奉願上候、何卒願之通被為

仰附被下置候者難有仕合可奉存候、以上

伯耆国米子町人

大谷九右衛門

元文五年申四月日

寺社御奉行所様

御役人中様方

13

右之通御座候

一

右元文五年四月私共祖父之者儀

御公儀江御訴詔之儀共翌歲寬保改元八月

御請披之儀相濟候付同十二月廿六日從

大廣院様

日光宮様江為

御使者蓮華寺五郎八様を以其節從

14

宮様乍恐私江祖父儀御頼被為思召候趣
御請被為仰達候御口上之写并右從
宮様御頼被為思召之趣御坊官万里小路
民部卿様より御宿坊迄被為仰進候所之
御紙上之写如左

護法院万里小路民部卿

15

以手紙得御意候、然者兼而

御存知被成候通大谷九右衛門

事京都御外戚清水谷

前大納言殿へ御心安御出入

仕候故彼御方より御頼有之

宮様江蔑御目見等被仰付

候事御座候、此度九右衛門

御公儀江八願之筋相濟國元

16

伯州米子江寵帰候由

就夫九右衛門儀米子御城主

不相替只今迄之通万事

御憐愍之御申付被遣候ハ、

宮様御悅可被思召之間

此等之趣無急度貴院より
御檀家御役人中迄宣御申
入可被成候、以上

17

十二月十八日

右之通御座候付御請

御口上之趣御書附之写如左

従松平相模守殿

宮様江御請口上之趣

一 此度大谷九右衛門儀

御賴被為遊趣承知

18

仕畏奉存候

一 九右衛門

御公儀江御願申上候義も

御座候此以後右之儀相願候ハ、

役人共評儀も仕可遣之由

此儀ハ津田周防より内々二而

護法院迄之口上ニ候

十二月廿六日護法院

其方儀

大谷九右衛門へ

宮様被為添御言葉

御座候、御承知被成候間其旨

相心得可申候、已上

19

右之通御座候

一 右願書之面ニ書願候通私共先祖之者より尤祖父某

節迄

■節迄

公方様江

御目見被為

仰付候節

御紋之時服拝領仕候条、尤

太守様江

20

御目見之節茂先祖之者共儀
御紋衣拝領被為
仰付今以右

御紋衣拝領頂戴仕罷在候、且又私共祖父之者
共迄江府相詰候節ハ例月朔日為御礼

太守様江

御目見被為

(貼紙)

「例月御目見へ被仰付
候節御役人様より
被遣候三通」

仰附候付、右祖父大谷九右衛門儀貼紙下

21

御公儀江御訴詔、以後尤

大廣院様御代延享元年八月廿二日於

鳥府乍恐

御在國之節年頭

御目見之儀奉願候所達

御聴、則以御書附願之通被為

仰付候之旨、尤

大和様於御館御役人中様より被

22

仰渡候趣如左

大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門
上村惣右衛門

御用之儀有之候間

唯今

御館江可被出候以上

八月廿二日

大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門
上村惣右衛門

(貼紙)「此所より志摩様被遣候
御書壹通入候」

御目見

23 (注 23は横線で見消)

追^而申入候此紙面

昨晩可遣候処、夜^ニ入

候之故今日遣候、何分

早御屋敷へ可被出候

以上

八月廿三日

右之通御座候条、則御書

附之写如左

24 (注 24は横線で見消)

其方儀御在国之

節年頭

御目見願之通被

仰付候

子八月廿二日

右之通御座候

25 (注 25は横線で見消)

一 右本文^ニ書願候通私共先祖之者江

竹嶋渡海之儀被為

仰附候次第先規より書附之写左之通

御座候、尤有増相遺候書附之写

^ニ而御座候、猶以委細ハ此外相遺候

書附所持仕罷在候

26 (注 26は横線で見消)

竹嶋渡海之次第先規より書附之
写如左

一 貞享元二月

權現様以来之御勘状又者御由緒之

御書有之候^者早速可相断之旨

御触之節乍恐私共先祖之者儀

權現様御代天正九年四月聊御奉公筋之就

27

台徳院様御代元和四年五月阿部四郎五郎様蒙御執持、則

松平新太郎様江以

28

御奉書竹嶋渡海之儀被為

仰附候次第委細以書附相断之、尤相写差出

候所之右

御奉書之写如左

従伯耆国米子竹嶋江

先年舟相渡之由候

然者如其今度致渡

海之段米子町人

29

村川市兵衛大屋甚吉

申上付而達

上聞候之処不可有異義之

旨被仰出候間被得

其意渡海之儀可被

仰付候、恐々謹言

永井信濃守

在判

五月十六日

30

井上主計頭

在判

土井大炊頭

在判

酒井雅樂頭

在判

松平新太郎殿

31

右之通御座候

一 台徳院様以来

御代々様江

御目見被為

仰付候節竹嶋鮑二箱獻上仕候、尤獻上之為

御残御老中様方御側御用人様方

若御年寄様方寺社御奉行様方江茂

32 (注 5行目~7行目迄横線で見消)

進上仕候付

台徳院様御代御側御用人松平右衛門太夫様より
御書被成下候ケ様之類余夥所持仕候處

近所出火損失候

享保年中裏長家ニ住居仕罷在候處類焼仕候

祖父共節逮給失申候、尤相残候写如左
一筆申入候、其地へ被參候

付くし鮑三百入壺箱

持參候由留主居之者

33 (注 4行目迄横線で見消)

共方より日光へ申越候心付

之通祝着申候、尚追而

可申候間不具候、恐惶謹言

松平右衛門太夫

正綱書印

五六日

(貼り紙) 「右之通御書

外二通入ル」

則大谷九右衛門当之御書有之也

追^而申入候

34 (注 34は横線で見消)

御目見之儀ハ伊豆方江

申入候、以上

村川市兵衛殿

参

右之通御座候

一 台徳院様以来

御代々様

(貼り紙) 「此所享保三年

十二月出火手入候^(カ)

35

御上意之趣從

御老中様方被為

仰渡候^ニ付右之次第從

阿部四郎五郎様以御書被為

仰越候ケ様之類并

御老中様方より被為預

御挨拶候^ニ堅御捻其外御役人様方御書

類焼之節損失仕候

中を^茂余夥所持仕候通右書頭之通紛朱仕候

36 (注 36は横線で見消)

尤相残候写如左

好便之間一筆令申候

然者今度於京都進上

仕度旨被申候桐之木

串炮去月土井大炊頭殿

御披露被成一段首尾

能上り申候、竹嶋^江渡海

様子を^茂委

37 (注 37は横線で見消)

御尋無残所仕合候条

此旨可申遣由大炊頭殿

被仰渡候条如斯候、御披

露之刻則小濱民部方^江

申遣江戸^江迫させ候

得旨

上意付^而小濱民部方へ申

38 (注 38は横線で見消)

越其御請^茂疾當着

候之間満足可有候、片
便宜故令省略候、委細者

期後處之時候、恐々謹言

安倍四郎五郎

霜月十五日 正之書印

村川市兵衛殿

参

39

ペ 安倍四郎五郎様 酒井讚岐守

人々御中 忠勝

昨日者伯耆国町人大屋九右衛門
私宅へ参候付御使之指添へ右之
九右衛門儀竹嶋へ船を渡候、此頃
罷帰候、例公方様御目見仕候由

令得其意候、隨^而貴殿儀炎天之

40 (注 5、6行は横線で見消)

節毎日御普請場へ御出候儀
御太儀存事^ニ候何も期面上候
節候、恐惶謹言

八月十五日

為歲暮之御祝義

過朔日之御状殊

41 (注 41は横線で見消)

手掛五人一箱贈給

過分至候、御手前無

事御入候由目出珍重候

我等儀^茂無恙有之

事候、將又御紙面之

通四郎五郎可申

開候、來春竹嶋へ

渡船六月中者

42 (注 42は横線で見消)

可有御參勤旨万

慶其節可申承候

恐々謹言

大久保宮内少輔

十二月十七日 正朝書印

村川市兵衛様

御返事

右之通御座候

(貼り紙) 「和泉守様御書

三通入候」

「四郎五郎様御状

四通書入候」

「長谷川正悦様御状

壹通書入候」

43 (注 43は横線で見消)

一 台徳院様以来

御代々様

(貼り紙) 「此前書計

書不申」

御目見之節於

御城御役人様方より御礼之次第書

被為成御渡候、ケ様之御書付茂余夥所持

仕候処右書顯之通紛失仕候尤相殘候写如左

五月廿八日

一 如例月御礼相済

44 参勤之御礼

綿式百把金馬代 松平肥前守

綿百抱金馬代 松平主殿頭

蠟燭二箱金馬代

松平筑後守

一 上枚彈正大弼在着付而

以使者蠟燭五箱二種一荷

被差上之使者銀馬代を以

自分之御礼色部又四郎

終而御次之間伺公之面々并

落縁二而

45

伯耆国米子町人參上

箱着 大屋九右衛門

右終而入御

右之通御座候

一 大猷院様御代寛永十五年一月

46 (注 46は横線で見消)

西之御丸御書院床之板御書棚之板

御用^ニ付竹嶋梅檀可差上旨被為

仰付候之所首尾能上納之仕候、此外

御代々様江

御上納奉相勤候節從御役人様方右

御請取書被成下候ケ様之類^茂余夥所持仕候

處右書頭之通給朱仕候尤相殘候等如左

焼失仕候

47 (注 47は横線で見消)

請取申御材木之事

一 武枚ハ 唐梅檀長壹丈四尺四寸 はゝ武尺壹寸

あつ武尺壹步

一 武本ハ 桐長六尺壹寸内 壱本^ニ五尺五寸廻^ニ五尺三寸
ハ中^而り壹本ハ中^而寸廻^ニ五尺三寸

合四本

右之進上木請取申者也、如件

正保貳年

酉九月廿日 長井清太夫 印形

中根七左衛門 印形

48 (注 48は横線で見消)

美濃部与藤次 印形

伯耆国米子町

村川市兵衛殿

右之通御座候

一 廣有院様御代明暦三年六月四日祖父村川市兵衛

49 (注 49は横線で見消)

儀家督始而參府仕候節於

江府被為遊

御尋候^ニ付竹嶋渡海、尤例格之儀并

御代々様江

御目見之節

御紋之時服拝領被為

仰付候次第委細御請書仕差上候条、右書付
之写如左

50 (注 50は横線で見消)

乍恐口上之覺

一 私共竹嶋江渡海仕候儀者

台徳院様御代元和四午五月

阿部四郎五郎様就御執持

松平新太郎様江以

御奉書竹嶋渡海之儀被為

51 (注 51は横線で見消)

仰附右

御奉書私共頂戴仕罷在難有仕合奉存候事

一 竹嶋渡海之船江

御紋之船印且道具蒙

御免今以左之通御座候、先年右船朝鮮國江

漂着仕候節茂

御紋之舟印相立候故朝鮮表二而茂別而

御馳走二而御座候由、且又私共義道中

52 (注 52は横線で見消)

御紋之指札蒙

御免難有仕合奉存候事

一 御目見之儀寺社御奉行様江奉願候、尤

私共當御地江罷下候儀八九年二而一度參

府仕候并

御目見之度々

御紋之

御時服袴拝領仕難有仕合奉存候事

53 (53は横線で見消)

右之通御座候、以上

伯州米子町人

明暦三年酉六月日

右之通御座候

一 常憲院様御代寺社御奉行秋元摂津守様より
御使を以御口上書被成下候写如左

口上之覺

5 4

今度当御地江被相越候付

昨日者御入来殊竹嶋

丸干鮑一箱預持參怡悅之

至候為其如斯候、以上

秋元摂津守

使

五月廿日

常憲院様御代元錄七年三月祖父大屋九右衛門儀

御目見之年番ニ御座候處、尤幼少ニ罷在候ニ付

5 5

同苗大谷藤兵衛儀為代江府相詰、則三月廿八日為

參上之御礼

御目見被為

仰付難有仕合奉存上候、尤元錄五年六年竹嶋江

舟相渡候得共唐人罷在所務不仕帰帆仕候付

例格之通

獻上之鮑無御座候間改而干鮑一箱

獻上仕候、且御役人様方江茂箱肴差上申候

5 6

其刻為御挨拶以御使御口上書被成下候、數通

右書顯候通紛失仕候尤相殘候写如左

口上之覺

昨日之干鮑一箱

預持參候、令祝着候

為其如斯候、以上

秋元但馬守

使

5 7

三月廿九日

昨日者干鯛一箱

持參令祝着候

為其以使申候、以上

加藤佐渡守

三月廿九日 使

右之通御座候

58

元和以来竹嶋江渡海之船節々朝鮮國江流着仕候条、尤寬文午歲大屋九右衛門仕出船數之内壹艘廿老人乘帰帆之節、朝鮮江被吹流候所舟者破損致候得共人數者船頭水主共無別條陸江上り候而則朝鮮人出合介抱仕其許之於奉行所吟味有之、其上逗留中馳走日本江帰帆之節國王より船頭水主へ貼別目録等之次第其砌對州之役人中へ

59

船頭水主委細書付出候控之写如左

伯耆国漂流人口書之覚

一 伯耆国米子与申所之村川市朱衛大谷甚吉仕出之拾三端帆之船二艘人數五拾人乘当年午ノ二月三日本国出船、同十三日隱岐國江着船、四月六日彼ノ所出帆、同八日竹嶋へ着船仕候事

一 船主村川市朱衛大谷甚吉儀

60

御朱印頂戴仕居毎歲竹嶋江舟差渡相整候物者ミチの魚の皮同油串鮑ニ御座候、則

御朱印之写所持仕罷在候事

一 国本よりハ二艘之船三而竹嶋江渡於此所拾五端帆之船壹艘作り我々廿老人者則拾五端帆ニ乘三艘ニ而七月三日彼嶋帰帆之節遭難風二艘之儀者何国江漂着仕候茂不存候、拙者共乗船者洋中ニ二夜漂罷在、同五日之夜四ツ時分朝鮮國之内ちやんきり

61

灘と申所へ致漂着於浦口舟破損仕夜ル之

八ツ時分陸へ游上り居申候處、朝鮮人出合我々手引申ちやんきりへ列参、宿壹軒二二三人宛召置候而粥を振廻申候、此所ニ五日逗留仕候家数廿軒程相見へ申候、其内ニ地頭被罷越切麦酒肴等振廻被申候其後ちやんきりの城下江被引越五日逗留いたし候

七月十四日ちやんぎりを罷立道中せそんと申所
地頭より酒肴振廻被申候事

地頭より酒肴振廻被申候事
うるさんと申所へ三日逗留仕候、此外道中泊り
申候得共所之名覺不申候事
同廿一日とくねき江参着仕候、其日菓子酒肴
振廻被申候、其外逗留中三度酒肴振廻御座候
此所逗留七月廿一日より十月三日迄罷在候、同四日
とくねきよりさすとふと申所へ罷越候、此時茂とく
ねき地頭より酒肴菓子振廻被申候事

七月六日より十月四日迄ハ朝鮮國より扶持方塩噌薪等迄賜之御馳走ニ而御座候事

人數廿壻人宗門并歲付

上乘

船頭

一同宗 旦那寺 同国 福嚴院 同四十 久兵衛

一同宗旦那寺同国西福寺同廿五又右衛門

か
ぢ

6
4

6
3

6

一 同 宗	淨土宗	日那寺	同国	大蓮寺	同四十二	与三右衛門
一 同 宗	日那寺	同国	淨土寺	同三十七	太郎右衛門	あわひつき
一 同 宗	日那寺	隱岐国	淨土寺	同三十六	小作	同役
一 同 宗	日那寺	同国	同寺	同三十二	五郎作	
6 5	一 真 宗	日那寺	伯耆国	万福寺	同三十八	長兵衛
	一 禪 宗	日那寺	同国	法增寺	同廿九	楫取
	一 禪 宗	日那寺	同国	安國寺	同廿二	傳助
	一 同 宗	日那寺	同国	万福寺	同三十九	桶大工
	一 真 宗	日那寺	同国	本教寺	同廿二	久右衛門
	一 法花宗	日那寺	隱岐国	万泉寺	同廿九	水夫
	一 禪 宗	日那寺	同国	同	作兵衛	
	一 同 宗	日那寺	同国	同	十兵衛	
6 6	一 真 宗	日那寺	伯耆国	万福寺	同五十四	同
	一 禪 宗	日那寺	同国	法增寺	同廿七	作助
	一 同 宗	日那寺	同国	同寺	次郎左衛門	
	一 禪 宗	日那寺	同国	同	治兵衛	
	一 同 宗	日那寺	同国	同	角助	
	一 同 宗	日那寺	同国	同廿九	同	
	一 同 宗	日那寺	同国	同廿九	甚七	
	一 同 宗	日那寺	同国	同四十	同	
	一 同 宗	日那寺	同国	同	九郎助	
	一 同 宗	日那寺	同国	同	彦八	
右我々宗門寺請之儀本国出船之刻大谷甚吉						

手前ニ留置宗門寺請を別紙ニ相認舟奉行へ遣往来
切手出シ申候を請取出帆致候、然處及船破損候刻右之

6 7

往来切手箱共ニ捨リ申候故所持不致候、尤船ニ積候
荷物舟道具之儀破損之節捨リ不申候を朝鮮人
被入念取揚給候品々改御座候、以上

十月十日

右之趣船頭次郎兵衛書付差出候覺書如件

明ル未ノ

寛文七年

大谷九右衛門

二月廿九日

右之表末ノ二月廿九日書之写

6 8

右ニ書顯ノ通朝鮮国逗留中従国王船頭水ミツ水ミツ江

貼別之目録式通如左

漂倭處別贈
頭倭一人
　　白米武斗
　　白紙弐卷

　　薄様之厚キ
　　樣成ル紙

従倭二十二名

　　白米各壹斗

　　白紙各壹卷

巡察使（花押）　丙午九月日

朱印

6 9

漂倭二十二人

　　白米拾肆石拾斗

　　大口魚壹百拾尾

　　清酒弐拾弐瓶

　　東菰弐拾弐塊

　　生鮮弐拾弐束

　　甘醬陸斗陸升

際

右同断

丙午十月日

右同断

70

右之通御座候

一 竹嶋江渡海仕候道法之内隱岐国嶋後福浦より
七八拾里程渡候而松嶋と申小嶋御座候付此嶋へ
茂渡海仕度旨

台徳院様御代御願申上候所願之通被為

仰付竹嶋同事ニ年々渡海仕候、尤毎度奉差上候

71

竹嶋渡海之繪図ニ書頭候御事

一 台徳院様以来

御巡見被為成御通候節伯耆国米子御止宿之

砌村川市兵衛大谷九右衛門被

召出竹嶋渡海之儀、尤

台徳院様以来私共先祖より

御目見被為

仰付候次第被成御尋候付委細言上、則書附

72
差上申候御事

一 元錄マニ五年壬申歳如例年竹嶋江渡海仕候處、唐人
罷在依之帰帆仕候、夫より六年七八年迄
御差図を以渡海仕候處、年々唐人相増罷在候付
所務不仕帰帆之節其次第委細御届ケ申上候

然處元錄マニ九丙子年正月廿八日

松平伯耆守様江以

御奉書右竹嶋渡海制禁之旨被為

仰出候趣被為仰渡其段奉畏候、尤右

御奉書之写如左

先年松平新太郎

因州伯州領知之節

相伺之伯州米子之

73

町人村川市兵衛大谷

7 4

甚吉竹嶋江渡海

至于今雖致漁候

向後竹嶋江渡海之

儀制禁可申付旨

被仰付候間可被存

其趣候、恐々謹言

土屋相模守

在判

正月廿八日

戸田山城守

7 5

阿部豊後守

在判

大久保加賀守

在判

松平伯耆守殿

右之通御座候

7 6

一 竹嶋渡海制禁被為

仰出候付家業を失渡世難仕、依之祖父村川市兵衛

儀元禄十丑八月江戸へ罷下、同九月寺社

御奉行所井上大和守様迄乍恐御歎之

願書差上暫時江戸相詰罷在候処、病氣^ニ付

在所江龍帰候事

一 有徳院^{見セ消レ}様御代

一 当御代様御代享保九年辰四月竹嶋渡海之儀

被為遊御尋其旨於鳥府御言付を以

被為仰渡候趣如左

一 先年竹嶋江伯耆国より相渡候者唐人出合

7 7

追拵候、其節唐人何人程嶋^ニ居有之候哉

弓鉄砲等持居申候哉、年号月日共委細書付

可差上候事

其以後又罷越候處其節も唐人出合追拵候

其節^者唐人両人召捕罷越候、其節之首尾并

年号月日相調可差上事

7 8

右之嶋^ニ有之候品委細書附可差上事

竹嶋東西広サ大概之繪図仕可差上事

右嶋^ニミち有之候哉、其外獸類有之由相聞候

此段委細書付可差上事

右嶋^ニ竹木^者如何様成もの有之候哉、御書付

可差上事

唐人相渡り候節と伯耆国より相渡候時節

違候様相聞候、此段も可申上事

伯耆之浦より竹嶋迄渡海之数里ハ如何様有之

7 9

候哉、竹嶋より朝鮮^江者如何程可有之候哉、此段

書付可差上事

右之通

御尋^ニ付御請書差上候所之写如左

第御一箇條之御請

1

元錄^(ママ)五壬申年二月十一日米子より出船、隱岐国

嶋後福浦^江着岸、三月四日福浦より出船、同廿六日

朝五ツ時竹嶋之内いか嶋と申所^江着船、様子見申

候得^者鮑大分取上ヶ申様相見ヘ不審奉存候故

8 0

同廿七日朝濱田浦^江参候内唐船貳艘相見ヘ申候

内壹艘^者すヘ船壹艘ハ浮船^ニ而居申候唐人三十人

計見ヘ申候、右之浮舟乗り此方之船より八九間程沖

を通り大坂浦と申所へ廻り申候、右之内両人陸^ニ

残り居申候処^ニ又小船^ニ乗り参候故此方之船^ニ乘

申候^而何国之者と相尋候得^者老人ハ通辞にて

朝鮮国かわてんかわくの者と申候付、此嶋^者

日本之地^ニ而従

御公方様代々拝領仕、毎年渡海いたし候嶋^ニ而候所^ニ

81

何とて其方共参候哉^与相尋候得^者此嶋より北^ニ当り
嶋有之、三年^ニ壹度宛國主之用^ニ而^ニ鮑取^ニ参候
國元ハ二月廿一日類船拾壹艘^ニ而^ニ出船いたし、難風^ニ
逢五艘^ニ而^ニ已上五拾三人乗此嶋^ニ而^ニ三月廿三日流
着、此嶋之様子見申候得^者鮑有之候間致逗留
鮑取上ヶ候由申候左候ハ、此嶋を早々被立候様
申候得^者舟少損候間造作仕調次第出船可仕
候間其許之御船是^ハ御す^ハ可被成^与申候得とも
此方共船^者す^ハ不申、先人計陸^ニへ上り見分仕候処
兼^而此方より拵置候諸道具并漁船八艘見^ハ不申

82

付通辞へ段々吟味仕候得^者浦々へ廻遣イ候由
申候、先此方之船す^ハ申様^ニと申候得共唐人^者
大勢此方^者纔廿老人^ニ而御座候^ニ付無心元奉存
竹嶋より三月廿七日之七ツ時出船仕申候、然共何^ニ而
茂印無御座^ニハ如何と奉存唐人之拵置候串
鮑少笠壹ツ網頭巾壹ツ味噌かうし壹玉取之
致出船、四月朔日石州濱田浦へ着船仕夫より
四日雲州雲津浦迄参翌五日七ツ時米子^ニへ

帰帆仕候、右之趣元錄^(ママ)五壬申年四月六日竹嶋

83

渡海之船頭水主共口上申候、右唐人弓

鉄砲所持不仕候哉と被為遊

御尋候、其節吟味仕候処惣^而武具之類所持不仕候

第御二箇條之御請

一

元禄六癸酉年二月下旬米子出船、雲州雲津

三月初雲津より出船、隱岐國嶋後福浦へ着致

四月十六日四ツ時福浦を出船、同十七日八ツ時竹嶋^江

參着仕候処唐人大勢居申候付陸^江

上り壹人吟味仕候処不埒之申様付頭と相見^ハ申候

者壹人下方之者壹人已上兩人召連竹嶋ヲ

同十八日八ツ時出船仕、同廿七日罷^江候^而早速右之

84

段鳥取江御届申候処御東被成御窺右両人
之唐人長崎江被遣候其後戊亥両年渡海仕
候得共唐人大勢居申候付無所務ニ而帰帆仕候
第御三箇條之御請

一 竹嶋有之品々委細書付差上候様被為
仰出候付古來渡海之船頭水主共へ相尋見知候
物迄品々書留置候付此度左之通書付差上申候

85

木竹之類

一 五葉松 一 梅檀木の葉紫檀ハマツシ 一 たいたら

一 きわだ 一 椿木の葉紫檀ハマツシ 一 とが

一 櫻 一 竹 一 まの竹

一 一 梧葉もはちのこと 一 桐 一 かび

草之類

一 にんしん 一 にんにく 一 ふき

一 めうが 一 うど 一 ゆり

一 こほう 一 あをきは 一 ぐみ

一 いちご 一 いたどり

一 辰砂岩ろくせうのやうの物御座候得共漁迄を
心懸申候付此段者碇と知不申候

一 彼地に大河三筋御座候、水主共右川ニ而手水
遣申候節山風ニ何方共なく宜香仕候其外ニも
珍敷物茂可有御座奉存候得共深山ニ而山之
中へ者ふかく参かたく候由申候

第御四箇條之御請

一 竹嶋東西広サ之儀竹木重り相知不申由并

86

嶋廻り者凡拾里余も可有御座哉与水主共

申候、絵図之儀者別紙ニ仕差上申候

第御五箇條之御請

一 竹嶋ニミちの魚之外獸類有之哉と

御尋被為遊候、左之通書附差上申候

鳥獸之類

87

嶋廻り者凡拾里余も可有御座哉与水主共

申候、絵図之儀者別紙ニ仕差上申候

第御五箇條之御請

一 竹嶋ニミちの魚之外獸類有之哉と

御尋被為遊候、左之通書附差上申候

一 一 一 一
鳩 山雀 ミチ魚
一 一 一 一
ひよ鳥 雀 ねこ
一 一 一 一
かへらひは あな鳥 鮎

四十雀	一	一	一
なぢこ	一	一	一
くまたか	一	一	一
其外鷹類	つばめ	かもめ	かもめ
		鴉	鴉

第六箇條之御讀

居人林沢候時食と仰書同上レ
林沢候時食と
違候哉と被為遊

御尋候 古来此方より^春三月^夏渡海七月^秋上旬
帰帆仕候、年々渡海之節吟味仕見申候処、此方より
彼嶋小屋之内^内置候諸道具漁船等少^茂

取散候樣子相見不申候間、唐人共前夕渡海

仕候儀者無御座与奉存候、但元錄〔マツコトノシテ〕五壬申歲三月

時節者不奉存候

第七箇條之御請

甲等矣、長二丈一寸、鷹工者一百四十二合里、重一石、甲等、伯耆國より竹嶠送渡海之數里并竹嶠より朝鮮へ

御事候
者四拾里程可有御座之様水主共申候、濱目三ツ柳
村より隱岐国嶋後迄三拾五六里御座候、竹嶋より

朝鮮山を見渡候所少遠く相見候様四拾里程と申上候

右之通此度被為遊
御尋侯寸、古來書

書付差上申候、以上

享保九丙辰年

閏四月三日 伯州米子町人 村川市兵衛

9
1

一 右竹嶋東西之広サ大概之絵図仕差上候写左之

通御座候、委細之儀者別ニ大絵図所持仕罷

在候、尤竹嶋之儀磯竹嶋_与申候得共私共古來より

御公_江指出候所之書附_{ニ者}竹嶋と唱來候

且絵図之通濱田浦着船之所より竹か浦迄

壹里余_者竹敷_{ニ而}御座候、ケ様之儀_ニ付竹嶋

と唱候哉_与奉存候

92 竹嶋大概之絵図如左

朝鮮國

北

まの嶋 まの嶋

一、竹嶋大廻り拾里余竹嶋ヨリ
朝鮮_江四十里計り伯耆

国米子より竹嶋_江百五十里

北浦 大坂浦

柳浦 竹嶋 古大坂浦

いか嶋

濱田浦入津所 松嶋 松嶋

此間四十間計り

北国浦

是より濱田浦四十里斗り

竹ヶ浦

西

唐船ヶ崎

隱州嶋後

福浦

是ヨリ松嶋へ七十里計り

隱州燒火山

中ノ嶋ヨリ福浦へ八里

隱岐嶋前三嶋

隱州中嶋

隱州千振 雲津ヨリ千振へ十八里

雲州雲津 雲州三保関

東

93

右之通御座候

一 御尋^ニ付右御請書并絵図相添差上候所
再応之

御尋之趣如左

一 米子より出雲国雲津浦出船之所迄海路陸路
何程有之候哉、但海上迄致往来候哉

一 元錄^(ママ) 五壬申歳朝鮮人^ニ出合候節米子より

94 渡海之船頭水主其外人数何程并船何程
ニ而罷越候哉

一 翌六年癸酉歳罷越候節舟数并人数

一 何程^{ニ而}致乗船候哉

一 渡海之節前々弓鉄砲致用意罷越
候哉

一 同七甲戌歳同八乙亥歳両年罷越候節
人數^ニ舟數も同前^{ニ而}有之候哉

一 朝鮮人^ニ出合候翌酉歳罷越候節竹嶋^ニ朝鮮人

95 大概何十人程有之候哉

右之通再応之

御尋^ニ付御請書差上候趣如左

乍恐口上之覚

一 伯耆国米子より雲州雲津浦迄之道法
米子より濱ノ目境村迄陸四里半出雲国

96

宇井浦^江五丁計之船渡り御座候、夫より同国
三保関^江武里、三保関より雲津^{江者}陸路
壹里都合七里半五丁

一 米子より雲津迄舟路九里

一 元錄^(ママ) 五壬申年村川市兵衛大谷九右衛門竹嶋^江

相渡申候舟式百石計積申候、船壹艘遣申候
船頭水主式拾老人鳥銃五挺鎗三筋遣申候

尤其節居申候唐人三拾人計見及申候

一 元禄六癸酉年之渡海船壹艘船頭水主

式拾壱人鳥銃五挺鎗三筋持參仕候、其節

之唐人數大勢_与計控書_ニ御座候、前之船

式艘遣候節_者鳥銃拾挺計遣申候、弓ハ

遣シ候儀無御座候

一 戊亥兩年渡海仕候節船頭水主船數

鐵砲數鎗等同前_ニ遣申候

一 竹嶋_ニ居申候朝鮮人壹年々々増亥歲抔ハ所々ニ

五拾人三拾人程宛大勢罷在候由_ニ御座候、以上

享保九年辰五月十日

伯州米子町人

大谷九右衛門

村川市兵衛
村川市兵衛

右之通御座候

一 再応之

御尋_ニ付右御請書一通差上候、以後重而

御尋之趣如左

一 竹嶋_江致渡海候船頭水主存候故_{ニ而}罷在

米子_ニ住宅之者候哉

右之通

御尋_ニ付御請書奉差上候趣如左

乍恐口上之覺

一 米子灘町弥三兵衛と申者七十式歲_ニ罷成申候
四拾年以前_ニ竹嶋_江一度渡海仕候、此度鳥取_江
召連參候者_ニ御座候

一 米子同町長右衛門_与申者五十三歲_ニ罷成申候
私共鳥取_江參候時分ハ舟_{ニ而}罷出、近頃罷戻り
申候付様子相尋申候得共元祿四年より同六年
迄三年之間渡海仕候様_ニ申候、私共儀右之者
十九歲か廿歲計_{ニ而}一度渡海仕候様覺申候故
右之通申上候処、此度直_ニ相尋候得_者唐人渡海
之節兩年共參申候由御座候

一 米子片原町長兵衛と申者六拾三歳罷成申候
此者前之四月中旬舟^{二而}罷出未罷帰不申候

101

故委細相知不申候

一 米子立町源右衛門と申者八拾四歳罷成申候
三拾七年以前四度渡海仕候由申候

一 米子灘町吉兵衛と申者七拾九歳罷成申候
四拾三年以前迄十度渡海仕候由申候、右兩人ハ
極老行歩不叶候故右鳥取へ召連不申候

一 米子片原町太兵衛と申者七拾五歳罷成申候
四拾六年以前^三兩度渡海仕候由申候、右兩人之儀者
私共急^二鳥取へ罷越候付相知不申候處、此度

102

御尋之上^{二而}申出候間書付差上申候、以上

伯耆国米子町人

村川市兵衛

享保九年辰六月廿三日

大谷九右衛門

29

103

一 右享保九年辰四月竹嶋渡海之次第從
江戸御尋之節、猶又從
鳥府御尋之條々、則以御書付被為
仰出候趣如左

申渡之目録出来之節

別紙^二認之品左之通

一 徒三拾三年三拾老人跡迄
遣候船頭老人^茂存候故

104

不仕候^者其通ヲ書印候事

一 此度召連候老人^茂三拾

三年より已前之水主^二有之候
者其段も書印候事

一 唐人竹嶋^江參居候節家宅
者^者拵不申兩人方之船方共之

小屋掛け残置、夫^二居申候^者其

通書印候事

一件之節已前唐人竹嶋二而

105

- 見不申候ハヽ其通書印候事
一 元祖之名只今之市兵衛
迄何代
一 竹嶋御免被遊渡海初り
年号等
一 右之儀御執持被遣候
御旗本衆御名并御執持
被下候由緒

106

- 一 新太郎様江御老中より
御奉書之写
一 御紋之風見御免被遊、品
一 兩人先祖江戸江御目見ヘ
罷下候初年号
享保九甲辰ノ年四月日
右之通御尋ニ付御請書一通
差上候処、猶以祖父村川市兵衛儀
出府被仰附候趣如左

107

覚

- 一 村川市兵衛儀御用之事候間早々当地江
可罷越候
一 市兵衛当地江罷越刻新太郎様御代
御老中御奉書可致持参候
一 大殿様御代荒尾内匠江従宗對馬守殿
之御状可致持参候
一 其外古来より竹嶋渡海之儀ニ付覺書可有
之候間不残持参可申候
一 市兵衛不おほヘ有之候者存知候者召連

108

可罷越候、已上

六月日

右之通^二御座候、就夫祖父村川市兵衛儀

乍恐出府仕御尋之次第委細御請

申上候条、尤右持參仕候所之從

對馬守様^江被為預

御挨拶候御書之写如左

109

尚以庄五郎殿御在江

戸之由承候故江戸^二此等

之通直申達候朝鮮^{二而者}

馳走之様子天波弥三右衛門

定^而可申入候

一書令啓候然^者

庄五郎殿御領分

伯州之内米子

110

村川市兵衛代官

弥三右衛門竹嶋渡

海仕用所相仕廻

六月之末帰國之

刻被放風朝鮮國

之内府山之浦漂

111

流仕候処、日本人

故於朝鮮表別^而

念を入れ此方へ被相

送候条、彼弥三右衛門

与七郎^二我等者相

添送遣候委細

112

沼川次兵衛可申入候

間不能一二候恐々

謹言

宗對馬守

書印

八月廿六日

荒尾内匠殿

御宿所

113 (注 113は横線で見消)

右之通御座候

一 右祖父村川市兵衛儀江戸江始而罷下候
節元禄二巳六月於

御国屋敷從

志摩様

御公辺之儀万々蒙御差団候趣、尤
但馬様より米子御役所江被仰達候御書之

写并右祖父村川市兵衛儀江府より罷帰候節

114 (注 114は横線で見消)

右為御礼警愚札候之処、御披露之為

御返翰從

但馬様御書被成下候類、尤從

外様或者年始御祝書差上候節、右御披露之
為御返翰御書被成下候所相遺候写如左

一笔申入候然者村川

市兵衛伴先頃江戸へ参

115 (注 115は横線で見消)

着申候得共相煩申由二而

去ル六日荒志摩長屋江

參万々御差団次第二

可仕^与申付御聞役衆

被申談江戸二而之首尾

具^二被申含候

殿様江去ル七日首尾能

御目見仕候村川市兵衛伴^与

在之候而ハケ様之者共父子

公方様江御目見難調旨

此度

公方様江之御目見若調不

申儀も可有之と御聞役共

申、就夫何茂被致相談親

市兵衛儀者年罷寄最早

江戸へ罷越儀難成ニ付此度

怍罷越候、則名をも市兵衛与

117 (注 117は横線で見消)

申候与申込候者

御目見調安可有之与志摩

被存名改親之名ニ被致候由

志摩より我等方江右之趣

被申越候、此旨可被得其旨候

一 親市兵衛儀早々名を

いケ様共替申様ニ可申渡候

一 最早此已後者親市兵衛

江戸江不罷越怍市兵衛迄

118 (注 118は横線で見消)

参候様ニ親市兵衛江可申渡候

一 村川儀江戸仕廻候ハ、直ニ其元へ

帰候様ニと当春各へ申渡候得共

江戸より直ニ当地江罷越首尾

能候而直ニ当地江参候様ニと

江戸江之便ニ村川方江

家來方より申遣候、恐々

謹言

119 (注 119は横線で見消)

六月廿一日 書印 但馬

柴山甚内殿
鷺見佐左衛門殿

120 (注 120は横線で見消)

白井七左衛門所迄飛札

殊以串海鼠一折到

來心入之段欣然候

公方様江首尾能

御目見相済候由一段之

仕合候、猶七左衛門

可述候也

但馬

121 (注 121は横線で見消)

九月十二日 書印

村川市兵衛とのへ

飛脚殊雉子番

到来紙面之趣令

委聞候、入念段満足

申候、此度之願首尾能

相調一段之事ニ候、謹言

122 (注 122は横線で見消)

荒修理

書印

十二月十五日

村川市兵衛殿

修理年賀為祝詞

其地從町中飛脚

殊着一種到来

令満足候、遠路

123 (注 123は横線で見消)

被入念段一入候猶

白井七左衛門より可述候

謹言

玄番

正月晦日 書印

村川市兵衛殿

大谷藤兵衛殿

宮本三郎右衛門殿

124 (注 124は横線で見消)

為年甫之嘉儀

家頼所迄來札殊

一種到来欣然之至候

弥無異加年之旨

一段之事ニ候、謹言

上総

正月三日　書印

村川市兵衛殿

125 (注　125は横線で見消)

右之通御座候

附

當時天明三卯正月年始御祝書
差上候付、今以旧格之通從
平右衛門様右年始御祝書為
御返翰私江御書被成下候、右

御書之写如左

家來方迄來札

欣然ニ候、弥無異

嘉年一段事ニ候、謹言

126 (注　126は横線で見消)

平右衛門

二月朔日　書印

村川市兵衛殿

書状令披見候如來意

新正之慶賀申籠愈

御無異加年旨珍重存候

平右衛門殿堅固被致

超歲候為年甫之嘉儀

紙面之趣遂披露候処

被入念候儀、則被及書中候

恐々謹言

林新兵衛

書印

二月朔日

127 (注　127は横線で見消)

紙面之趣遂披露候処

被入念候儀、則被及書中候

恐々謹言

砂川源五右衛門

書印

村川市兵衛殿

右之通御座候

128

一 御入国已來尤私共祖父之者迄例歲竹嶋

渡海仕候節

鳥府御用之趣以御注文被

仰付候所之御書付并御用之品々被

召上候節御小目錄被成御渡候

ケ様之類も余夥所持仕候處及紛失申候

尤相殘候御書附之写如左

129

覚

一千貝

三千貝

弐千五百貝

三千六百貝

弐百貝

壹斗五升

一 上々串鮑
一 上 串鮑
一 中 串鮑
一 上々丸干
一 上 丸干
一 鮑腸塩辛

弐斗

一 木耳

殿様御用也

竹嶋串鮑目錄

牧野清左衛門

正月十一日

村川市兵衛殿

131

一 上々串鮑 拾五連
一 上 串鮑 拾五連
一 中 串鮑 三百貝
一 下 串鮑 七拾連
一 腸漬鮑 三百貝
一 壱斗

132 一 腸塩辛 壱斗
一 木くらけ 五升

右者
大殿様御用候、以上

牧野清左衛門

正月廿九日

村川市兵衛殿

133

一 中々串鮑	三拾連
一 中 丸干	五百貝
一 下 丸干	弐百貝
一 腸漬鮑	百貝
一 腸塩辛	八升

右之通

壹州様御用候

134

牧野清左衛門

正月廿五日

村川市兵衛殿

覚

一 上々串鮑弐拾三連

内 五連市兵衛江戸土産二被遣拾
八連八此方へ被召上候

一 上ノ串鮑百連

内 二十五連八市兵衛へ被遣候
七十五連八此方へ被召上候

一 中ノ串鮑百拾連

内 三十連八市兵衛へ被遣候
八十連八此方へ被召上候

一 下ノ串鮑百拾連

内 十二連八市兵衛へ被遣候九
十八連八此方へ被召上候

右串鮑都合四百八拾壹連

上々上中下合二百七拾壹連八此方へ被召上候

一 下々同百三拾八連ハ不殘市兵衛へ被遣候

一 桐ノ木拾本之内

太キ能木三本を召上候
候七本ハ市兵衛へ被遣候

一 油木海月

此方御用無之候

一 上々串鮑直段壹連三付

丁銀七匁宛

一 上同 直段壹連三付

同五匁九分宛

一 中同 直段壹連三付

同四匁弐分宛

135

上々同百三拾八連ハ不殘市兵衛へ被遣候

内

上々上中下合二百七拾壹連八此方へ被召上候

桐ノ木拾本之内

太キ能木三本を召上候
候七本ハ市兵衛へ被遣候

油木海月

此方御用無之候

上々串鮑直段壹連三付

丁銀七匁宛

上同 直段壹連三付

同五匁九分宛

中同 直段壹連三付

同四匁弐分宛

一 下同 直段壱連付 同三匁壱分宛
136

右之直段_ニ被召上候間、左様可被仰渡候

一 桐ノ木 直段付無御座候、拾本之内太キ能木

三本直段可被仰下候、以上

寛文四年六月十八日

山住源右衛門

宮田吉左衛門

印形

大脇太左衛門殿

坂川文左衛門殿

金万八右衛門殿

137 (注 137は横線で見消)

右之通御座候

一 右竹嶋渡海御禁制之旨、元錄_{（マ）}九年子ノ

八月於鳥府被仰渡翌元錄_{（マ）}十年

丑八月祖父村川市兵衛儀江戸江罷下り

竹嶋渡海御禁制之趣御請申上候_ニ付則

御公儀_江指出候所之書附并

御国屋敷_江御歎之願書差出候、右両度之控
相残之写如左

138 (注 138は横線で見消)

乍恐口上之覚

一 去年子之歳八月上旬從

松平伯耆守殿被仰渡候此度以

御奉書竹嶋渡海之儀向後御制禁被仰付候条
其通相守可申之旨御座候其段奉畏候、以上

伯州米子町人

村川市兵衛

元禄_{（マ）}元年丑九月日

乍恐口上之覚

一 私義先祖より竹嶋渡海之所務を以渡世仕候処

139 (注 139は横線で見消)

去秋竹嶋渡海之制禁被仰付、當時

渡世之經營難相成迷惑至極奉存候、大谷九右衛門
世懾^者幼少^ニ罷在候故私義此度御当地江
罷越何とぞ殿様御威光を以渡世之願も
仕前々之通御目見奉願度奉存候、恐多
奉存候得共以御慈悲右之願御取上ヶ被為
下候ハヽ難有可奉存候、依之右之段奉願候、以上

村川市兵衛

元禄十年丑九月廿一日

140

吉田平馬様
小谷伊兵衛様

右之通御座候、尤右享保九年閏四月

鳥府_江御尋之條々御請書壹通差上候

写如左

乍恐口上之覺

一 三拾三年より三拾壹年跡迄竹嶋_江渡海之

船頭水主存命_ニ居不申候、雲州并隱岐国より

過半召抱申候、右之所之者存命_ニ罷在候哉、此段
不奉存候

一 三拾三年已前竹嶋_江渡海仕只今相殘居申候
者五人御座候内式人_者廻船_ニ罷出宿_ニ居不申候
残三人之内式人_者八十余^ニ罷成申候、此度召連

申候七十式才_ニ罷成申候

此度召連候弥三兵衛と申水主ハ三拾三年より已前

渡海仕候者_ニ御座候

一 唐人竹嶋_江参居申候節自分小屋拵申候哉
と被成

142

御尋候、自分拵申候様子_ニ者相見ヘ不申候、毎年

此方より拵候小屋_ニ居申候由水主共申候

一 三拾三年以前竹嶋_江唐人見申候哉と被為遊

御尋候、元和年中以後唐人見不申候由其節

申上候

一 私共先祖何代渡海仕候哉と被遊

一 御尋候村川市兵衛儀三代已前より渡海仕名_茂

三代共_ニ市兵_衛與申候

一 大谷九右衛門儀唯今迄四代竹嶋渡海

143

御免之節_者甚吉_与申候後三代ヲ九右衛門と申候
一 竹嶋渡海被為遊

御免候年号

御目見仕候年号并其節御執持被遣候

御旗本衆御名之儀并御執持被下候

御由緒之儀被為遊

御尋候元來村川市兵衛先祖之儀_者乍恐

權現様御代天正九年四月於摂州表聊

御奉公筋之儀共御座候、其後中國_江寵下伯州

144

之内_ニ住居仕候処

新太郎様因幡伯耆被為遊御領知候節

元和年中御仕置之為上使阿部四郎五郎様

御越之刻私共先祖之者共隱州之海上竹嶋

与申孤嶋_江渡海仕候段御訴詔申上翌年

江戸表_江罷下り候所、右

御由緒之儀共御詮儀之上

新太郎様_江以御奉書竹嶋渡海之儀

被為仰附自夫兩人隔年_ニ渡海仕候

145

尤八九年之内老人宛罷越

公方様_江御目見申上候、尤始_而御目見

申上候年号月日相知不申候

一 御紋之風見之儀代々蒙御免候、是又

御免之品合相知不申候

一 元_{（ママ）}錄十年丑八月村川市兵衛儀江戸_江寵越

殿様御威光を以竹嶋渡海之儀相歎候得共
嶋之儀_者相調不申候由_ニ付大勢水主共難義仕候

必至と取続不申、其上病氣_ニ付同十六

146

未年三月於

御国屋敷御暇願在所_江寵帰候、以上

享保九甲辰年閏四月三日

村川市兵衛
大谷九右衛門

右之通御座候

147

一 右書願候通私共祖父之者儀

御公儀江御訴詔之節尤祖父大谷九右衛門儀
參府仕候条、自分日記之写左之通ニ御座候、尤

御公儀之御請披而已抜書仕候写ニ而御座候

委者是又別ニ書附共所持仕罷在候

御公儀江御訴詔之御請自分日記之写如左

148

一 御公儀江差出候所之願書毫通添書式通并
由緒書一冊元文五年申四月八日從

太守様御公儀江御達之儀河村彦十郎様
被成御執計、則私儀寺社御奉行所

牧野越中守様江御差出被成候事

一 越中守様御内寺社方御下役田中小右衛門様

荒木伊左衛門様次藤文左衛門様御三人内小右衛門様

御手ニ付申候、乍恐私共奉差上候御願書御取上

御見分被成候上ニ而段々御尋之趣御座候、隨ニ而

149

御請委細ニ申上候得者御尋之儀相濟申候御事

一 田中小右衛門様被仰聞候趣右之願書、則

越中守様御前江差上可申候、御見分被為成候
上ニ而追ニ可被召出候間得其意罷帰候様ニと被

仰候而奉畏被帰候事

一 御国屋敷江参上仕、右之趣委細御役人様方江
御注進奉申上候事

一 申四月十七日牧野越中守様より御差紙ヲ以
明十八日四ツ時ニ御屋敷江私義罷出可申与被為
居申候御奉行様方御座席之次第

150

仰付候、右御請書差上隨ニ十八日四ツ時ニ参上仕相
窺罷在候得者御奉行様方例月之通御寄合

被為成諸願之御吟味相始り私義被為召出相窺
居申候御奉行様方御座席之次第

一 牧野越中守様

一 本多紀伊守様

一 大岡越前守様

一 山名因幡守様

151

右之通御連座被為成候、御次之間御家々之御下役人衆中様方御連座被成候、其次之間_{二而}私共奉差上候御願書御役人様御持出被成候_而御奉行様方御前_{二而}御読上被成相修り申候其上_{二而}越中守様被為成御意候趣九右衛門

竹嶋之支配を誰か致候哉_与御尋被為成候、隨_而御請申上候竹嶋御支配之儀_者先祖之者共相蒙私共迄_後支配仕來り候由申上候、則御奉行様方御一同_ニ夫_者重キ事哉と御意被為成候、次_ニ御尋

152

之趣竹嶋松嶋両嶋渡海禁制_ニ被為仰出候

以後者御領主より御憐憫を以渡世仕罷在候由願書_ニ書願候段、然_者扶持杯請申候哉と御意被為成候、隨_而申上候御扶持_ニ者無御座御憐憫を以と書上候儀_者米子御城下_江諸方より持參候魚鳥問屋口錢之義、則私家祿_ニ被為仰附候并同役村川市兵衛儀_茂御城下_江入込候、塩問屋口錢之儀被為仰附候兩人共右之品蒙御恩賜忝奉存候旨申上候、其上_ニ而

153

大岡越前守様御意被為成候趣九右衛門此添書_ニ書願候通大坂御廻米船借り之儀并長崎貢物連中_ニ加り申度義弥御願申上候哉と之

御尋_ニ而御座候、隨_而御請申上候趣天道_ニ相叶御憐憫之筋相下り申候_者右之二品乍恐

御願申上度旨申上候、然_者又越前守様より被為成御意候趣九右衛門此二品之儀長崎表之儀_者長崎御奉行所之作舞并御廻米之儀_者御勘定方懸り_ニ有之候得_者此方之作舞_ニ而無之候故

154

此義者御勘定方_江相願申候而可然筋_ニ候此方之了簡_ニ不及候_者被為仰出候得_者

越中守様紀伊守様御一同ニ被為遊御意候

趣イヤ／＼左様_{三而者}無御座候、九右衛門御願之筋則

上江

御上江御伺申上候_而其上御差団次第_{二而}御勘定
方長崎御奉行所_{江茂}差出可申_与御詰開被為

遊候御事ニ御座候、又越前守様被為成御意候趣
九右衛門竹嶋_者大嶋_与絵団_{二而}相見候、嶋山之風
景竹木草類禽獸之類日本之模様_{与者}品

155

少々者相替申候哉_与御尋_{二而}御座候、隨_而申上候、私
先祖甚吉儀者自分_ニ渡海仕候_而其身竹嶋_{二而}
病死仕候、其已後者嶋主共兩人共_ニ自分渡海

模様者

不仕候故私義茂_茂眼前之儀者不奉存候、旧記ニ書頤し
指上申候通御座候と御請申上候、其上_{二而}越中守様
紀伊守様因幡守様より海馬之魚と申_者如何様之
形恰好成ものニ候哉と御尋被為成候、隨_而申上候みちの
魚と申ハ頭鹿之ことく両之鰭長尤鰭先キニ爪
有之能陸_ニも上り候、尾頭_者矢籠_{二而}一体ニ毛生ひ

156

毛色鹿の毛のことく_ニ而御座候、大ノ海馬_与申候得者
馬程_茂御座候条并嶋猫之儀皆黒色尾頭切レ
居申候由御請申上候此外辰砂岩綠青馬脳
杯之儀御尋被為成候隨_而御請申上候、然者
越前守様被為成御意候_者九右衛門兔角此
御廻米并貢物之儀者其持口之役所_{江願}

申可然候、此方共之作舞_{二而者}併ならざる事ニ候
と御申被為成候得者越中守様紀伊守様
より被為成御意候ハイヤ／＼兔角御上_江御伺

157

申其上御差団次第_{二而}御勘定所_江九右衛門儀
差出し可申_与被為成御意候得者御吟味之趣
相済申候、田中小右衛門様被仰候者最早九右衛門
すさり候へと之儀ニ御座候_而奉畏罷立候御事

一 御国屋鋪江参上仕今日於御役所奉差

上候御願書委細之御吟味相済、隨而乍恐

御請申上候儀御役人様方江具ニ御注進申上候御事

一 申四月廿四日牧野越中守様江乍恐為

御窺參上仕候、其節田中小右衛門様荒木伊左右衛門様

158

次藤文左衛門様御出合被成披仰聞候御口上之趣ハ
其方御願之儀去ル十九日寺社御奉行所御仲間
合様方御登城之節、則御老中様へ御差上
御被見ニ及申候間追而御沙汰之趣相下可申
候与之御事ニ御座候而其旨奉畏難有奉存上
候段申上罷帰申候御事

一 申ノ五月三日越中守様江乍恐為御窺參上仕
候得共田中小右衛門様御出合被仰下御口上之趣其方
御願之儀未何之御沙汰相下り不申候、然者其方より

159

被差上候由諸書ニ被書頭候所之御老中様方
より為御礼其方旅宿へ御口上書并參勤御礼
被申上候節、於御城御書出之御書附等何角
取揃御奉行所様江差上可被申候と被仰附候
隨而申上候、乍恐御願申上度奉存罷在候度ニ
御役所様より御差図を以右之御書附奉差上可
及御見分之段難有奉存候与御請申上罷候御事
一 申五月六日右被為仰附候御古書差上候目録
左之通

160

一 朝鮮國より竹嶋渡海之船頭水主江被遣候御餞別
之目録式通
一 松平右衛門太夫様より私先祖之者出府仕候節
旅宿被下置候御使札壹通
一 秋元摂津守様より先祖之者出府仕候節旅宿へ
為御礼御口上書被下置候壹通
一 秋元但馬様より私出府之節旅宿へ為御礼被
下置候御口上書壹通
一 加藤佐渡守様より私出府之節為御礼旅宿江

161

被下置候御口上書壹通

一 酒井讚岐守様より阿部四郎五郎様江先祖之者
出府仕候ニ付被為進候御手紙壹通

一 大久保宮内少輔様より私先祖之者江被遣候御狀
壹通

一 阿部四郎五郎様より私先祖之者江被遣候御狀
壹通

一 長谷川正悦様より私先祖之者出府仕候節為
御礼御手紙壹通

162
一 公方様江御目見被為仰附候節參勤独
礼之次第御書出壹通

一 松平新太郎様江御宛之御奉書之写壹通

一 松平伯耆守様江之御奉書之写壹通

以上拾四通奉差上候

一 其以後者五月七日ニ御役所様江乍恐為伺

一 參上仕候、然共重キ御事ニ御座候得者其年茂
及暮ニ申候御事

163
一 明ル西ノ二月十一日牧野越中守様より御差紙ヲ以

明十二日四ツ時御役所江罷出可申与被為仰附候
御請書指上、隨ニ十一日四ツ時御役所江參上
仕相窺罷在候得者田中小右衛門様御出合被成
尤去ル申ノ五月六日越中守様江差上申候御古書
拾四通御持出被成御改以上拾四通、則私御返
被成候其上ニ而被仰候右之古書去五月六日

差上被申候以後今日迄、則

殿様御居間御床之上ニ被為置候、尤御仲間様
方御寄合被為成候節御取出被為成候而御見分ニ

164

及候而是ハ由緒正敷事与被為成御意候、右之
筋ニ付此度御歎申上候儀、尤不便成事与被為
思召候而則書上申候式通之内壹品ニ而茂

埒明遣し申度物と被為成御意候旨小右衛門様
被仰聞候、隨ニ難有仕合奉存候趣御請申上
候御事

165
一 小右衛門様被仰候者右古書御覽被為成候ニ付
御役所之御帳面繰ヲ被為仰付相改見
候所ニ其方共先祖より御上江御目見之次第

166
一 委細ニ有之候由被為仰聞候御事

右之式ニ付其方共御願書添状ニ書付被差上候
条大坂御廻米船借之儀於御城御勘定
方御奉行様方江寺社御仲間様より委細被仰達
置候、則当月水野對馬守様御當番ニ而
候得者右御寺社御役所江被差上候通御願書
添書由緒書等相認候而對馬守様御屋敷
江罷出御取次役人衆迄其方可申上口上之覚
牧野越中守様より於御城先達而

167

對馬守様江御達被為置候願人伯州米子町人
大谷九右衛門儀御願書由緒書以上四通乍恐
差上申候ね寺社御奉行様より被為成御差出候故
乍恐參上仕候ね御憐愍を以願書之趣御沙汰
宜敷相下り申候様偏ニ奉願上候迄可申上候ね斯之
通被仰付候ね其旨相蒙難有奉存候然者

吉日を撰二月ノ六日對馬守様御屋鋪

小川町通江參上仕候而右御下知之通御取次衆

中様迄申上候、則御願書由緒書以上四通差上

168

申上候、御請取被成候而對馬守様御前江被
差上之暫時有之御取次衆中様御出被仰聞候
御口上之趣願書御取上被為成候、追而可被為召出
与之御意候間其旨相心得可被申与被仰出候

故奉畏候与御請候与御請申上罷帰候事

一 牧野越中守様江參上仕、右之趣田中小右衛門様ハ
申上候御事

一 御国屋敷江參上仕御役人様方ハ右之趣
御注進申上置候御事

168
一 同二月十七日之夕水野對馬様より御差紙
を以明十八日四ツ時神田橋通神尾若狭守様

御屋敷江罷出可申_与被為 仰付候御請書差上

申候_而隨而十八日四ツ時御屋敷江參上仕相伺罷在
候得共御取次衆中様より九右衛門罷出候得_与被

仰候故乍恐罷出申候御座席之次第

神尾若狭守様

水野對馬守様

神谷志摩守様

169

何野豊前守様

木下伊賀守様

右之通御連座被為成候御次之間_{二而}私共

奉差上候御願書御役人様御持出被成候_而

御讀上相濟申候上_{二而}若狭守様より被為成

御意候之趣九右衛門國本_{二而者}何を務ル事_二候哉_と

御尋御座候、隨而申上候同役村川市兵衛私義

御城下米子町年寄役義代々蒙相勤罷在候

170

与申上候得_者其上_{二而}被為成御意候

家業_者如何様成売買致候哉と御尋御座候

隨而申上候私共儀諸商売不仕候右御願書_二

書顯し申上候通元錄_(ママ)九年竹嶋渡海禁制

被為仰出候以後者因伯之御大守御門

伯州米子之御城主より御憐愍を以渡世仕

居申候段申上候得_者然_者御扶持を得申候

哉と之御尋_{二而}御座候、隨而申上候、左様_{二而者}

無御座候、米子御城下江持來り候魚鳥之

171

問屋店之座ヲ私家督_与被為仰附候、則

問屋口錢取仕候事_ニ御座候并_ニ同役市兵衛儀八

御城下江入込候塩問屋口錢取被仰附置候

此口錢を以渡世仕居申候、是以乍恐

公方様御太恩之御余光_与奉存難有仕合

奉存候旨申上候、其上_{二而}對馬守様被為成御意
之趣

公方様江御奉公之筋_者如何有之候哉_与之

172 御尋御座候、隨_而申候様御請申上候段恐入

奉存候乍去_二元禄八年朝鮮國王より竹嶋_与
申者從古來日本之御支配_{二而}御座候との
御證文を常憲院様御代被為遊

173 御請取候、然_者竹嶋日本之御支配_与奉戻候
儀_者乍恐元和年中村川市兵衛大谷九右衛門
先祖之者共安部四郎五郎様御取持を以テ
御注進仕候_ニ付達
上聞、則日本_江被為遊御支配候、依之私共_江
渡海被為仰附候、尤右竹嶋より

174 御公儀江極たる御藏入ハ無御座候得共唐木
之類御用木をも年々公納相勤、元和已來
八拾年之間九年_ニ一度參上之御礼申上難有
仕合奉存候、右之通_ニ御座候得_者竹嶋_与申ハ日本之
御支配成ル_与之聞を御公儀_江者御取被為遊
候義と奉存候、此段毫末之御奉公_ニ茂_相相當可申候哉
誠以恐入奉存候得共御請申上之由申候、其上_ニ而
對馬守様被為遊御意竹嶋竹木草類禽獸
海馬之魚鮑など之儀御尋御座候故隨_而申上候

此趣之儀_者委細旧記_ニ書頤し差上申候通_ニ
御座候由申上候得_者先御吟味之儀是迄_ニ而相濟
申候

175 一 對馬守様被為成御意候趣追日御評儀被
為成候_而可被為召出旨被為仰付候_而奉畏、則
御役所罷帰申候御事

一 牧野越中守様_江參上仕今日御勘定御奉行様へ
被為召出候得_而差上申候御願書御見分被為成候
上_ニ而段々御尋之趣御座候、隨_而委細_ニ御請申上候
得_者先_者御吟味相濟申候、右乍恐御注進奉
申上候旨申上候得_者則田中小右衛門様御承知被
成候御事

一 御国御屋敷江参上仕右之趣御役人様方江
委細御注進申上候御事

一 西ノ四月十七日水野對馬守様より御差紙を以明
十八日四ツ時御屋敷江罷出可申与被為仰附候
御請書差上隨而十八日四ツ時参上仕相伺罷在候
得者被為召出候御奉行様方御連座被為成候而

176

則對馬守様被為成御意候者九右衛門差上申候
願書御廻米船借之儀是者於大坂とまや
久兵衛越前屋作右衛門と申者年切ニ作舞仕申候
御儀定之年相達不申内者御役所より

年限

之返事之儀難申附也、然上者右両人之船

借り共ヘ其方より相対致候而船借役人江相加リ
可申哉、右之通ニ候故者役所より返過之儀難申付
与評義一決申也其旨相心得可申与
被為仰付候、隨而御請申上候趣先以及御沙汰

177

申上段難有奉存候、此上追而御慈悲相
下り申候儀乍恐御願申上度与申上すさり申

候御事

一 牧野越中守様江参上仕右之趣田中小右衛門様へ
申上候得者御承知被成候而小右衛門様御申被成候者
先刻御勘定御奉行所より寺社御奉行御仲間
様方江御使者相立候御口上之趣大谷九右衛門
差上候願書見分申上候評儀申候處船借之儀
於大坂年切作舞仕候者兩人有之候、未年

178

限ニ及不申候故役所より返過之儀難申付候得而
此段九右衛門へ申渡候、尤右船借り両人江相対
致候而加り可申哉与申聞せ候、右之九右衛門御差
出之儀ニ而御座候故如此以使者申達候与之
御口上書來り申候、則其方罷出御注進被申
上候儀御前江可申上候与被仰候御事
一 小右衛門様御申被成候者御役所御仲間様より

御老中様江其方共御願書御差上及見分
去年以来壹年半ニ打過、則御下知相下り此節

179

御勘定所江其方御差出被成候處、右之
御返答之趣二而者御上江相達御下知
相下り申候處相済不申候、然者寺社御仲間
様方御寄合之刻此儀御評儀被為成候而
又押返其方可被遣候哉与拙者共ハ存入候、追而
其方儀可被為召出候之間左様相心得可被
申候与被仰候御事

一 西ノ六月二日牧野越中守様より御差紙を以
明三日四ツ時御屋敷江罷出可申与被仰附候

180

御請書差上、隨而三日四ツ時參上仕相伺罷在
候得者田中小右衛門様御出合被成候而被仰候ハ
先頃其方へ申入候通先月十八日寺社御仲間
様御寄合之節御勘定所へ又々其方御指
出し可被遣与之御評儀ニおよひ御沙汰申候所
寺社御奉行様より御勘定所之御差図被
為成候ニ相当り可申哉与以後之入割之程
御氣付被為成候故重而其方御差出し

被為成候儀者御優予被為成候、然上者長崎

181

御奉行所江御差出見度与御評儀一決被為成
候付、先御登城之節於御城寺社御仲間
様方より長崎御奉行所萩原伯耆守様江
御面談ニ而其方儀御差出被為成与御達被為
成候御願書相認次第ニ參上仕可申候者
被仰付候、尤其節可被申上口上之儀
牧野越中守様より於御城先達而御達被
為成候伯州米子町人大谷九右衛門御願書乍恐
奉差上候与可申上候旨被仰付候、其上長崎御

182

奉行様當時御出府萩原伯耆守様
御屋鋪水戸橋長崎御勤番窪田肥前守様
御屋鋪表六町町与則田中小右衛門様より

御書附被遣、隨^而申上候、御下知之趣承知仕
奉畏候、御願書相認其上吉日を撰

伯耆守様御屋敷^江參上可申上候、先以難有
仕合奉存候、乍恐御序之刻殿様御前
宣御執成奉賴上候旨申上罷帰申候御事

一 御國屋敷^江參上仕、右之段御役人様方^江委

183

細^ニ御注進申上候御事

一 西六月十日長崎御奉行所萩原伯耆守様
御屋敷へ御願書持參上仕候^而則御取次衆
中様^江右田中小右衛門様より被仰付候通之口上
申上乍恐御願書差上申候、御請取被成御下役
中西幸内様御申之儀追付殿様御座敷へ
御出可被成候、其旨相心得可被申^与被仰聞候、其上

^{二而}御屋敷^江被為 ■^(虫掛)出相窺罷在候

伯耆守様被為遊御意候趣其方儀国元^{ニ而ハ}

184

如何様成壳買申候哉^与之御尋^{ニ而}御座候、隨^而
御請申上候私共儀元禄年中竹嶋松嶋両嶋
之渡海制禁^ニ被為仰出以後^者御願書^ニ

書顕差上申候通伯州米子之御城主より

御憐愍を以渡世仕難有奉存候旨申上候、然^者

扶持を得候欵と被為成御意候、隨^而申上候左様

^{ニ而ハ}無御座候、御憐愍と申上候儀^者米子御城下へ

諸方より入込申候魚鳥之間屋店之座ヲ私

家督^与被為下置候、同役市兵衛儀^者御城^{下江}

185

入込候塩問屋口錢之儀被為仰付候^而渡世仕
罷在候、全公方様御太恩之御余光

^与奉存上兩人共難有仕合奉存候段乍恐申上

候得共其上又被為成御意候趣其方共在所^{ニ而}

奉行所^江勤など申候哉と之御尋御座候、隨^而

申上候、兩人共^ニ代々米子町年寄御役相務申候

儀御座候由御請申上候、又竹嶋竹木草類

禽獸海馬之魚匏など段々^与御尋御座候

一 伯耆守様被為遊御意候者九右衛門御上江差上
申候願書及見分候、長崎表貢物入札連中江
相カリ申度与之儀此事者古來より江戸京
大坂堺駿河長崎皆御領二而者入札連中江
相カリ申者茂有之也、惣而御領之外より貢物
入札人數二入候事未其例無之也、我等老人之
了簡二不及、尤同役江可申談也、急二者請込不成
故先者左様二相心得可申与被為仰付候、寺社
御奉行様江茂此段以使者可申達候与可被為

成御意候、隨而申上候、乍恐追而何卒御慈悲
相下り申候段幾重二茂奉願上候旨申上候而す
さり申上候、中西幸内様被仰候唯今御前二而
被為成御意候通御領之外より貢物人數江相加り
候其例未無之候得者御老人様之御了簡二難
被為成御事御尤存候、然上者追々品茂可有之
候左様二相心得可被申与之御事二而御請申上罷
帰申候御事

一 牧野越中守様江參上仕田中小右衛門様江右之
趣委細申上候得者御承知被成此趣殿様江

可申上与御申被成候御事

一 田中小右衛門様被仰聞候御口上之趣其方共御願之
儀者御老中様被為及御沙汰御差図を以テ
御勘定所并長崎御奉行所江寺社御仲間様
方於御城則御面談二被為仰達候而其上其方
御差出シ被為遣候處二則御番御役所より右之
御断二而者相濟不申事候、追而御仲間様方
御寄合之節此儀御評義可被為成候、其上二而

可被為召出候間左様二相心得可有之与之
御事二御座候、隨而申上候、私共体之儀ケ様迄二
御苦勞奉懸申上候段千万恐入申上候、然共
御慈悲者御上より相下り申儀二御座候得者

乍恐幾重二茂御慈悲之段奉願上候与申上

罷歸申候御事

一 御国屋鋪江參上仕御役人様方江右之趣委細

御注進申上候御事

一 西ノ八月十七日牧野越中守様より御差紙ヲ以

190

明十八日四ツ時御屋敷江可罷出と被為仰付、則
御請書差上、隨而十八日四ツ時參上仕相窺罷
在候得者田中小右衛門様御出合被成則越中守様
御口上之趣此度其方共願之儀由緒正敷有之

付而御上江被為成御達御老中様及御沙汰

御差図を以御勘定所并長崎御奉行所江

其方御差出被為成候所、右両御役人様より右之
御断之儀以御使者被為仰達候、尤其方へ

茂右之通被為仰渡候条寺社御仲間様方

191

此儀及御沙汰又々押返其方儀右之御両

御役所様江御差出可被為成儀ニ候得共其方々之
御奉行所与申八重キ御事ニ候得者入割如何哉と

又御用捨之儀茂有之候、然所其方共儀不便
被為思召候依之江戸京大坂其外於御領

當時御公儀江之御為次ニ其身之利潤共可成与

存付之儀也有之候ハ、品々書付を以罷出御願
可申上候、御吟味之上三而宜敷可被為仰付候間
其旨相心得可申与被仰付候、隨而御請申上候

192

重々以御慈悲之御下知相蒙申上候段千万
恐入難有仕合奉存候、乍恐御前宜御執成

奉頼上候、然上者御国屋敷江も此旨相達

可申上と御礼仕候而罷在候御事

一 御国屋敷江參上仕御役人様方江右之趣

委細ニ御注進申上置候御事

一 御堂上清水谷前大納言様家へ由緒

御座候而御代々様江御出入仕候

一 御同家清水谷中将様江茂右御同事之儀ニ

193

御座候而則御両卿様江御出入申上候故乍恐御
懇意之趣相蒙難有仕合二奉存上候、六ヶ年
以前未ノ八月江府江為御願罷下リ申候節
右御両卿様より被為仰附候之義此度其方
関東ヘ罷下リ申ニ付

日光宮様江御出入被為仰附其上二而乍恐
御目見等をも申上候得者自然御沙門之御慈
悲を相蒙可申上事も可有之候、左候得者
其方生前之面目不可過之候与被為思召

194

則宮様江御両卿様より御頼之御実書手持せ
被為遊可被下候旨御家臣一色主水様より右之
趣被為仰聞候得而難有奉存上候、隨而御請
奉申上候御事

一 清水谷前大納言様御儀者則

日光宮様御外戚二而被為遊御座候、則
前大納言様中將様御親子様より兩通之

御実書頂戴仕江府江罷下リ申候而未ノ

九月五日上野江登山仕於

195

御殿大西淡路守様江迄右之御実書両通
奉差上候得者則万里小路民部卿様御出合
被成候而御書御請取、則宮様江御差上
被為成候、其上二而又御出合被成私ヘ被為仰付候ハ
其方儀者清水谷前大納言様中將様より
宮様ヘ御実書を以御頼之趣御申被為上候
依之則御出入之儀被為仰付候、其上
御目見之儀宮様明後七日日光江御登
山被為遊候、還御以後可被為仰付候間其旨

196

相心得可被申候与之儀ニ御座候、其上國本ニお

体被致候哉

みてハ如何様之壳實土候哉、尤國主ヘも
年始之御目見をも被致候哉、格式等之儀
如何と御尋被為成候故御請書奉指上候事

乍恐口上之覚

○一 元和四年從

右御請書元和四年從御公儀様御奉書奉頂戴
仕竹嶋江渡海仕彼嶋而之所務を以渡世仕

來難有奉存上候、然所元錄(ママ)年中右之嶋江

朝鮮人不慮二渡海仕申候二付其已後竹嶋一

197

渡海仕候儀制禁二被為仰附候得而私共儀

家業を失渡世難仕候所從

台徳院様御代常憲院様迄

御代々様江参勤之独礼申上來候者共二御座候
得而則因伯之御太守御内伯州米子之

従御城主御憐愍を以御城下江入込申候

魚鳥類之間屋店之座を私家督与被為

仰附置候、此儀を以渡世仕難有奉存罷在候
并御太守御在国之節者年始為御礼

198

御目見申上候、右之趣乍恐御請書奉差上候、以上

元文四年

米子町年寄

未九月六日 大谷九右衛門

上野御坊官中様

右之通御請書奉差上候御事

一 富様江未ノ九月廿三日日光より遷御被為遊其
已後十月十五日御目見被為仰附首尾能

御目見申上難有仕合二奉存候御事

一 申正月廿六日年始之為御礼富様江

御目見被為仰附首尾能独礼申上候難有

199

奉存上候是より例年正月廿六日御定日二而
年始之御目見申上來り候御事

一 申七月九日從宮様牧野越中守様へ

龍王院家為御使伯州米子之町人

大谷九右衛門儀京都清水谷前大納言殿家へ
御心安御出入申候ニ付彼ノ御方より御頼故則
宮様へ御出入被為仰附候、其上御目見等
を茂申上候、依之右之九右衛門儀此度
御公儀江御頼之筋申上候得者宜御取作舞

200

被遣候様ニ此段御内々ニ而宮様御頼ニ被為思召候
旨被為仰進候ニ付、則越中守様より御内々
ニ而御請被為仰上候、右之趣申ノ七月十二日
上野於御殿大西淡路守様を以被為

仰越難有仕合奉存上候御事

一 西十二月十八日宮様より太守様迄米子
町人大谷九右衛門儀元禄年中竹嶋渡海之
儀制禁以後者則從御城主御憐愍を以
渡世いたし居申由、此已後只今迄御申付被

201

置候之通万事不相替被仰附置候者

宮様御悅可被思召之旨万里小路民部卿
承り御上意之趣御手紙ニ而護法院院家
被為仰渡候、依之院家則御国屋敷へ
御出入被成候御事

一 西ノ十二月廿六日、從御太守様

宮様江御上意之趣為御請御使者蓮花寺
五郎八様上野江御登山被成護法院迄
右御請被為仰上候御口上之趣

202

一 大谷九右衛門儀御公儀江御願之筋御座候此已後
相繼而御願申上候者役人共評儀いたし遣可申候此
御口上者護法院迄被仰進候御事

一 西ノ十二月廿七日万里小路民部卿様より御使札ヲ以
御用之儀有之候故上野御殿江參上仕可
申之旨被仰附候、隨而參上仕相窺罷在候
所則民部卿様御出合被為成被為仰付候御口上
之趣從宮様國御屋敷江其方儀
護法院為御使御内々ニ而御頼被為思召

候之旨被仰遣候御上意之為御請

蓮花寺五郎八と申仁昨日登山_{ニ而}御請之儀

護法院迄被仰上候、依之右之趣申渡候重キ

御事其方家旨ハ子孫_ニ至重々難有奉存

可被申候、尤國御屋敷御役人中_江右之趣

御礼可申上旨被為仰附候、隨_而冥加至極

難有奉存_者御請申上候御事

翌廿八日上野御殿_江参上仕乍恐右之

御礼御坊官衆中并護法院院家へ右之御礼

一 同日御国屋敷へ参上仕候得_而御役人様方まで
乍恐右之御礼奉申上候御事

一 京都吉田左兵衛督様_江由緒御座候_而私義

御出入仕候御当家御廉中様御儀_者若年寄

本田伊豫守様御息女様_{ニ而}渡せられ候_{ニ付}

六年已前未ノ八月私関東_江罷下り候節、則

吉田様より伊予守様_江大谷九右衛門義御頼之

趣御書頂戴仕於江府右之御書御家來

中條六郎右衛門様迄差上置、依之未十月
廿八日伊豫守様御目見被為仰附蒙御懇意

難有仕合奉存候、其後御客對被為成候節_ニ

茂御目見仕御公儀_江御願万端御内々御

懇意蒙り候御事

伯州米子町人

大谷九右衛門

延享元年

子五月日

右者元文寛保之際御公儀_江御訴詔之御請并竹嶋渡海

之次第先規より書附之写荒増如茲御座候、尤竹嶋渡海制禁
之後享保九甲辰四月御公儀御尋之儀_ニ付委細御請書仕

鳥府表_江差上之候、因茲右祖父大谷九右衛門事、元文五年
四月參府仕御訴詔之趣自分日記迄相写シ置候、尤右延享

元年より當時天明四年迄四拾老年_ニ相成申候、以上

天明四年甲辰四月日

207 (白紙)

伯耆國米子町人

村川市兵衛

大谷政太郎